

英語教育と文学的教材 [15] †

—音読指導と読解力の育成—

金小路佳子*・幡山 秀明**
 栃木県立宇都宮商業高等学校*
 宇都宮大学教育学部**

2008年12月に高校・新学習指導要領案が公表され、「授業は英語で行うことを基本とする」と明記された。新学習指導要領では、「言語力(コミュニケーション力)」の育成が重視されているのが特徴であり、英語の場合には、言語力のうち、特に「表現力」の向上が重視されている。英語という言語についての知識を増やすだけでなく、言語そのものと言語で表現されている内容に関する知識を活用し、自分の意見などを表現できるようになることが重要であるということだ。「表現力」の向上は、「四領域(聞く・話す・読む・書く)の統合的な指導」であり、「授業は英語で行う」ことに密接に関連している。日本では日常の生活場面において英語を使う機会がほとんどない。このような生活環境において、生徒が「英語を使える」ようになるためには、教室という場をコミュニケーションの練習の場としても捉えるべきである。

勤務校では、英語Ⅰ・英語Ⅱ・リーディング・ライティング・英文法の授業を行っているが、教材は訳読式に向くものが多い。一般的に高校では、コア科目である「英語Ⅰ・Ⅱ」の授業は、依然として「生徒に英文を日本語に訳させて、先生が文法解説をして終わり」という指導方法が主流である。これを改善するには、いかに授業中に生徒に英語を使って活動させ、活動を通してコミュニケーション力を向上させるかを考えていかなければならない。

英語を使った活動を授業の中に取り入れることが、「四領域を統合した指導」につながり、ひいては「英語で授業を行う」ことになるのだと思う。教科書が訳読に向いているものであっても、活動を取り入れることによって、いかに表現力を育成していくことができるのか。また、基礎的な英語力の構築には、音読活動がいかに有益であるのかを今までの自分自身の授業を顧みながら述べていきたい。

キーワード: 音読・筆写指導、音読の高速化、長期記憶への転送、味読の楽しさ、高質な教材内容

1. 新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業の反省点

1) 新学習指導要領の趣旨

中学校における学習の基礎の上に、聞いたことや読んだことを踏まえた上でコミュニケーションの中で自らの考えなどについて内容的にまとまりのある発信ができるようにすることを目指し、「聞くこと」や「読むこと」と、「話すこと」や「書くこと」を結びつけ、四つの領域の言語活動の統合を図る。

2) 新学習指導要領のポイントと指導上の留意点

技能別科目を廃止し、「コミュニケーション英語」に統一し、「言語力(コミュニケーション力)」の

育成が重視されており、言語力のうち、特に「表現力」の向上が重視されている。「表現力」の向上は、「四領域(聞く・話す・読む・書く)の統合的な指導」が必要であり、聞いたことをもとに書く・話す、読んだことをもとに書く・話す等の活動を授業に取り入れながら4技能を統合的に指導していくことで表現力向上を目指すものだ。これは、「授業は英語で行う」ことに密接に関連しており、科目名を「コミュニケーション英語」に変えたのも、必ず活動を入れた授業を行うことを明確に示すためである。大切なのは、生徒が授業で英語を使って活動し、その活動を通してコミュニケーション力などを向上させていくことだ。活動には、自分自身の意見を書く・話すことのみならず、友人が書いたものを読んで感想を述べ、グループで出た意見をまとめて発表する等様々な活動が含まれ、4技能を統合させると

† Yoshiko KONGOJI*, Hideaki HATAYAMA**:
 English Education & Literature as Teaching
 Materials [15]

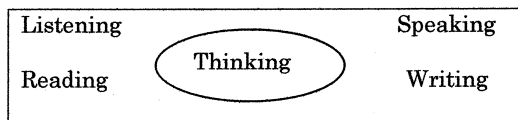
* Utsunomiya Commercial High School

** Faculty of Education, Utsunomiya University

いうことは「知覚・感情・思考」の伝達を意味する。つまり、英語を使って活動させることがコミュニケーション力の育成につながっている。

四領域の統合的な指導のイメージ

(文教大学国際学部 阿野幸一准教授による)



2. 授業の反省点を踏まえた今後の改善点

①読解力を身に付けさせるために、意味のまとまりごとの内容理解や細かな文法事項等を一生懸命教へても生徒は理解していない。きれいにノートを取り、訳をしっかりと暗記することが英語の勉強であり、目的になってしまっている。

↓

(改善点)

・言語活動を通して学ぶ工夫。コミュニケーションのツールになるアクティビティを取り入れ、感情の動き、気づきを大切にす。

②活動、状況の設定がなく、コンテキストが分からないまま、無理な自己表現活動へと結びつけている。

↓

(改善点)

・コンテキストをしっかりと理解した上での自己表現活動を工夫したい。

③生徒が英語を使用する機会が少ない。教師による説明、解説が多すぎる。

↓

(改善点)

・生徒が英語を使用する機会を増やす。アクティビティの工夫。
・すべての科目で Classroom English をできる限り使用し、英語の雰囲気醸成していく。

④生徒同士のペアワーク・グループワーク等のシェアリングの時間がない。

↓

(改善点)

・グループ、ペアのアクティビティを多く取り入れ、生徒に感情の動き、気づき、学びを実感させたい。

「人間の脳は忘れるようにできており、シェアすることがないと3日で完全に忘れてしまう。人に伝えることで、エピソード記憶として記憶される」という考えはハーバード大学でも取り入れられ、実践されている。(英語トレーニング ICC リーディング力養成講座より)

・ペア・グループ活動はコミュニケーション力育成の訓練にもなり、読んだり、見たりした教材の内容の感想を日本語で述べる場面でも使いたい。

⑤時間に余裕ができた時、次の課に進んでしまい、他のクラスとの進度を合わせることを優先してしまっている。その結果、試験範囲を合わせて、テスト問題数を減らそうとしている。(同学年指導者との共通理解が必要)

↓

(改善点)

・試験が終わって長期休業前の生徒の集中力の低下を考え、言語活動を取り入れたい。
・教科書に軽重をつけ、スローリーディング(味読)として扱う課を選び出す。
・高校のリーディングの教科書には生徒が感動し、考えさせられる内容が多いので、その深化を図る。
・シェアリングできるもの、生徒が自分たちで考えるものを読ませ、題材を踏まえての自己表現活動を取り入れる。

3. リーディング授業の改善点

リーディングの授業の予習として、単語の意味・品詞・発音記号等を調べ、本文をノートの左側に写し(またはコピーを貼る)、右側に本文の日本語訳を書いてくるということを長年にわたり生徒に課していた。辞書を引き慣れること、本文を熟読することで文構造を理解させ、独学でも英語を学び続ける土台を作ることが予習の習慣化の目的であった。しかし授業中は、音読練習や本文内容確認のためのTFテスト等を行ったとしても、本文中の意味のまとまりごとの内容理解や文法事項の説明に大半の時間が割かれており、生徒が予習してきたものとの答え合わせのような授業になってしまいがちであった。

では、どう改善できるのか。一つは、すべてのレッスンを同じように扱うのではなく、教科書のレッスンに軽重をつけ、①速読(予習なし)、②易しい英文を読む(自信をつける)、③味読(スローリー

ディング) 題材が「知りたい」「読みたい」を引き出すものに分類することだ。③は時間をかけて読み、訳読の良い面は生かして、特に文法構造上、和訳しにくい文を丁寧に訳したい。また、味読のレッスンでは、生徒たちが自分たちで考え、シェアリングする活動を取り入れ、できる限り自己表現活動(ライティング) に結びつけてグループでシェアさせたい。

二つ目は、授業中の活動の中に暗記を目的とした活動を入れることだ。暗記させたものの中から数多く定期試験に出題し、努力したことが身になる活動をさせたい。家庭学習で予習に割かれる時間はあまりにも長く、決して目に見えた効果が上がるものでもないのは先に述べた通りだ。予習させた和訳を赤ペンで添削していくのが授業の中心であるが、生徒の中には予習の際に文法や熟語に気づかず意味不明な謎の和訳をしたり、よくわからないから訳せなかったりという生徒が多い。帰宅後の限られた時間の多くを割いて訳の分からない和訳を書かせる予習に教育的価値はあまりない。それならば、意味が分かって、頭の中で映画のように内容が浮かんでくるようになった英文をしっかりと暗記させ、忘れない記憶にさせた方が本物の読解力につながり、4技能の習得により近づくのではないだろうか。

では、reception 活動である読むこと・聞くことと、production である話すこと・書くことが同一化し、意味=音=文字のネイティブ・スピーカーの英語に近づくには何が有効なのだろうか。

4. 音読の重要性

意味=音=文字の英語回路の獲得のためには、音読が最も有効である。ここでは、國弘氏の著作(2001)より、その解説の重要な部分の抜粋を引用する。(下線は金小路)

1) なぜ、日本人は英語が上達しないのか。

英語が言語の一つである以上、必ず書き言葉の文字と話し言葉の音声の両方が伴う。しかし、従来の日本の英語教育は、英語を目で読んで理解すること、すなわち英文読解や文法に重点を置いてきた。もちろん、外国語を学ぶのにこのようなアプローチは不可欠だが、これのみに傾倒しすぎては使える英語はいつまでたっても身につかない。音声面を重視した英語教育をしてこなかったことが、日本の英語教育最大の過ちであったと言っても過言ではない。

2) 音声の重要性

ヒトの言語には文字が伴うから「視覚言語」として目から学習することは不可欠である。しかし、それだけでは不十分で、音声で活用する練習も取り入れなければならない。日本の伝統的な英語教育が不備だった最大の理由は、とにかく視覚に重点が置かれ、音声面が軽視されてきたからだと考えられる。

3) 知的記憶と運動記憶

ヒトの記憶に関する様々な実験から、身体で覚えたことは長く記憶に留まるということが実証されている。知識を得ても、そのままにしておけば、やがて忘れ去ってしまうだろう。しかし、自分の身体のいずれかの部分、例えば耳や口、手などを使って、得た知識を能動的に活用すると記憶に長く残り、やがて自分のものとなっていく。だから、本当の英語をより確実にモノにするには、少しでも多くの感覚機能を動員するのが秘訣だ。

見たり読んだりといった受け身的な行為によって覚えることを知的記憶 (intellectual memory) と呼ぶ。それに対し、肉体の総器官を動かし、大脳内の回路を経ること、つまりは感覚機能をフルに使うことによって覚えることを、運動記憶 (motion memory) と言う。物事を体得しようとするには、知的記憶を運動記憶に変えなければならない。

野球でも、水泳でも、車の運転でも、何でもそうだが、どんなに本で勉強しても、どんなに事前に説明を受けていても、いざ実際にやってみるとなかなか上手くできないものだ。ところがいったん体で覚えてしまえばその知識は定着する。何年かぶりに自転車に乗っても、そんなに不自由なく乗りこなせるのは、それが運動記憶になっているからだ。

外国語の学習もこれとまったく同じである。どんなに単語やイディオムを知っていても、それが使えなければ役に立たない。知的記憶 (語彙力、文法力など) を運動記憶に変えるには、身体で覚えるしかない。そこでお勧めするのが「音読」である。

4) 音読のすすめ

声を出さずに勉強している人の英語力はかわいそうなほど伸びない。

英語を本当に身に付けようとするには、英語を理解する基礎回路の構築が先決である。建築に例えれ

ば基礎工事である。家を建てる時、基礎工事することなしに、柱を立てたり、屋根を造ったりすることはしないはずだ。英語の勉強もまったくこれと同じである。基礎回路ができていない段階で雑多な新しい知識を吸収しようとしても、ざるで水をすくうようなものだ。単語や構文などをいくら頭だけで覚えたとしても実際の場面では使えない。

この基礎回路を身に付けるもっとも簡単な効果的な方法が「音読」なのだ。

5) 音読に適する教材

音読する材料は、ある程度まとまった意味を持つ文章が望ましく、細切れの文章や挨拶などの会話文はあまり適していない。また、音読は書かれている内容をまず理解してから始めることが大切である。黙読して内容が理解できる文章だからこそ、目から入ってきた視覚言語としての知識を音読によって活性化することができる。

6) 手で書いてみる。

手を動かして英文を書き写すことも、極めて効果的な学習方法の一つである。英文を視覚だけで覚えるのではなく、手を動かして書き写しながら運動記憶として身体に覚えこませるやり方である。

目で見た文章を手を動かして書き写しているうちに、知的記憶から運動記憶に置き換えられて自分の中に入ってくる。朗読なり筆写なりをすることにより、身体の中にたたき込む、つまり内化させるのだ。これを繰り返しているうちに、頭の中に英語を理解する回路が徐々に出来上がってくる。

上記の抜粋に述べられているように、音読と筆写は、書かれた英文をただひたすら読んだり書き写したりする単純な学習方法である。しかし、この練習方法は外国語学習の王道であり、とりわけ音読による英語の吸収力は格段に高い。

では、実際の授業で音読練習や筆写をどのように取り入れていけば効果が上がるのだろうか。

5. 音読指導と筆写

1) 音読指導

音読の一番の目的はメッセージを伝えることである。分かりやすい音読は、意味の区切れ目で自然な息継ぎが起こる。自然な音読になるようにスラッシ

ュを少しずつ長いまとまりにして読む練習をすることを心がけたい。しかし、音読をするとどうしても音の正しさだけに集中してしまうが、音・意味・文字がつながるように練習する工夫が必要である。また、速音読ができるようになるまで練習させると、日本語に置き換えて理解する暇がなくなり、英語を英語で理解する「英語回路」の強化につながる。

[音読練習の流れの一例]

- ①文に意味のまとまりごとにスラッシュを入れる。
- ②ペアで音読。(レッスンの最後のペア音読練習では、小さな子供に読み聞かせるつもりで朗読させる)
- ③スラッシュごとに音読し、Read and look up に挑戦する。顔を上げて英文を見ないでもう一度読む。

Read and look up の音読練習によって、短期記憶を長期記憶に転送する脳の働きを高めることができる。これに筆写を加えると忘れない記憶になる。

國広氏(2001)の解説の引用にあるように、内容読解後の音読に絶大な効果があるのは確かであるが、実際の授業では、同じパターン音読練習だけでは、生徒は往々にして飽きがちである。また、音・意味・文字がつながるように意識して練習させることが「英語回路」の構築には重要である。

2) さまざまな音読の方法

音読の方法については何十種類とあるかもしれない。一般的なものもあれば、新たに誰かが命名したものもある。また、文字から目を離れたスピーキング活動に近いものも音読活動として取り上げられている場合がある。特に基本となり、有効な音読方法(本多敏幸, 2011)について紹介する。

- (1) コーラル・リーディング (Choral reading)
- (2) バズ・リーディング (Buzz reading)
- (3) インディヴィデュアル・リーディング (Individual reading)
- (4) パート・リーディング (Part reading)
- (5) オーバーラッピング (Overlapping)
- (6) リード・アンド・ルックアップ (Read and look up)
- (7) レスポンス・レシテーション (Response recitation)
- (8) シャドーイング (Shadowing)

音読方法には、上記にあるようにいくつもの方法

があるが、これらを一連の音読活動にただ単に取り入れればよいというものではない。そのときどきに何を目的に音読練習するかによって、方法を選ぶべきである。

3) 音読のバリエーション

[虫喰い音読の例] (神奈川大学外国語学部
久保野雅史准教授による)

(オリジナル) CROWN English Series 3 (旧版)

Korea was a colony of Japan for thirty-five years. The Japanese government forced the Koreans to use only Japanese. It was really painful for them to stop using their own language. They could not use it again in public until the end of World War II.

〈前置詞・接続詞を空所に〉

Korea was a colony () Japan () thirty-five years. The Japanese government forced the Koreans to use only Japanese. It was really painful () them to stop using their own language. They could not use it again () public () the end of World War II.

〈動詞を空所に①: 原形を与える〉

Korea (be) a colony of Japan for thirty-five years. The Japanese government (force) the Koreans (use) only Japanese. It (be) really painful for them to stop (use) their own language. They could not use it again in public until the end of World War II.

〈動詞を空所に②: 適切な動詞を選ぶ〉

Korea () a colony of Japan for thirty-five years. The Japanese government () the Koreans () only Japanese. It () really painful for them to stop () their own language. They could not use it again in public until the end of World War II.

be, force, use

ただ闇雲に大きな声で読むのではなく、まず、生

徒に何を身に付けさせたいのかを考え、目的意識を持たせて音読練習を行うことが大切である。音読を繰り返していればいつかは効果が出るということはない。明確な目的をもって指導過程に位置づけ、適切に活用しなければ、期待するほどの効果は上がらないだろう。確かに音読そのものは上達するかもしれないが、音読練習を基に速読力・リスニング力アップ・アウトプットへとつなげることができるかどうかの問題である。

上記の「虫喰い音読」は教科書の音読練習を終えた後で、空所を含んだプリントを配り、空所を補いながら音読させる活動である。虫喰い音読は、前置詞や冠詞などを適切に使って発話したり、動詞を適切な形に加工して使うためのトレーニングとして効果が期待できる。

〈動詞を空所に①〉と〈同②〉の練習は、既習事項を定着させるために有効な練習である。授業では新出事項の型のドリルに終始しがちで、既習事項をまとめて見直す練習が行われることは少ない。また、細切れに目的意識を持たせて練習できるので生徒を飽きさせず十分な練習を行うことができ、また準備としては、どの教科書の指導書にもテキストデータが付属されており、音読練習用のワークシートを作成するのに苦労することもない。

音・意味・文字がつながるようにアウトプットを意識して音読させるには、筆写を同時に行うことが効果的であると考えられる。筆写を行うことにより、細かな表現や文法事項がまだ自分のものとして内在化されていないことに気づき、アウトプットするまでには至らないことが分かる。筆写したことが長期記憶として記憶され、使える英語力につながるようになるまで繰り返し練習させるためには、単語テストや定期テストにも出題し、家庭学習でも音読と筆写を促す工夫をすることが望ましい。

4) 筆写による記憶の効率化

自分の手で書くことが、なぜ記憶の効率化につながるのか。脳科学者の茂木健一郎氏によれば、記憶のしくみを知り、記憶回路を使って記憶しなければ記憶は定着しないということだ。

記憶には、すぐ消えてしまう「短期記憶」と、忘れようと思ってもいつまでも頭の中に残っている「長期記憶」の二種類がある。さまざまなモダリティから働きかけると、記憶が定着しやすくなり、何

度も反復して脳にアクセスされたものは「重要である」と判断され、側頭葉に送られて「長期記憶」として定着する。

英文を覚える時を例にとってみよう。まず英文を見る。次に、それを書き写すわけだが、英文を見ながら写しては意味がない。一度英文を見たら、そこから目を離して「写す」。これを何度も何度も繰り返す。

ここでポイントになるのは、原文から目を離すということ、つまり一時的に頭の中に記憶し、それを書き写す作業にすることだ。原文を見ながら書き写すプロセスの中には「記憶する」という作業が抜けているために記憶が定着しない。この「記憶回路」を使って書くということは楽な作業ではないが、これを繰り返すことによって記憶の定着は段違いによくなる。（詳細は茂木健一郎(2007)の参考文献を参照）

前述した「2」のさまざまな音読方法の一つとして一例も挙げたが、Read and look up という方法もスラッシュごとに読み、一度教科書から目を離すという行為によって「記憶回路」を使っていることになり、音読による効果をさらに高めていると考えられる。

音読も闇雲な音読ではなく、目的意識をもたせて読むことが重要である。さらに、筆写も記憶回路を使って「長期記憶」として脳に蓄えられるような筆写方法で練習しなければ定着しない。

5) 音読・筆写の高速化

前出の國弘氏(2001)によれば、記憶には「知的記憶」と「運動記憶」がある。運動記憶のメリットは、「考えなくても体が動くこと（速い・正確）」と「いったん覚えると忘れないこと（長期記憶）」だ（鹿野, 2006）。また、目的意識を持って集中することで向上していく。従って、授業中の限られた時間内の活動で集中力を養い、運動記憶へと変えていくためには、毎日少しずつ音読と筆写を高速化していくことにより、より確かな定着が期待できそうである。

例えば、音読練習の第一段階でコーラス・リーディングやインディヴィデュアル、バズ・リーディングを行い、第二段階でオーバーラッピングや Read and look up を行う。音読の仕上げには fluency と音読速度をあげるためにシャドーイングを行い、高

速化することによって運動記憶として脳に蓄えることが定着につながると考えられる。高速化することで、「英語を処理する脳の働き」（英語回路）が強化され、内容読解の際にも、自分に訳す暇を与えない「英語」を「英語」で理解する回路が構築されると期待できる。

脳科学の分野においても、音読によって脳が活性化することが分かっている。「ブレインイメージング研究」の第一人者、川島隆太教授によれば、脳の中で最も高度な働きをし、「脳の中の脳」と言われる前頭前野は「読書をする事」、それも読書は音読する、そしてできるだけ早く読むようにすることで活性化されるということだ。また、音読が脳を活性化し、準備運動となって記憶力を高めるということも明らかにされている。読み書き計算が脳を育て、特に音読が効果的であり、これらの活動によって前頭前野を鍛えておけば、新しい物事をつくり出す想像力やコミュニケーション能力を向上させることができる。（詳細は川島隆太氏、2003年の参考文献を参照）

音読は言語習得に欠かせない活動であるだけでなく、脳の前頭前野を活性化し、脳を育てる重要な活動でもある。音読は内容を理解した後に行うのが効果的であるが、限られた授業時間の中で音読をできる限り多く取り入れるには、内容読解をどのように進めていくべきなのか。さらに、音読と同じように脳が活性化するコミュニケーション（他者と会話する）活動へどのようにつなげていったら良いのだろうか。

6. 教科書本文の内容理解

1) レッスン毎の軽重

教科書のすべてのレッスンを同じように扱うのではなく、教科書のレッスンに軽重をつけながら、①速読（予習なし）、②易しい英文を読む（自信をつける）、③味読（スローリーディング）題材が「知りたい」「読みたい」を引き出すものに分類することだ。

そのためには年間の教材をすべて読んでおくことが何よりも重要である。先読みをし、教科書の内容を様々な視点から分析・理解し、その特徴をつかみ、3つに分類しておくことにより、レッスン毎にメリハリのある授業を行うことができ、音読に時間をかけることが可能になる。教科書のそれぞれの課の内

容を4視点(著者・教員・個人としての教員の思い・生徒)で読み直し、生徒の心の奥深く後々まで残るような教材については、③味読教材として扱い、文法事項を押さえながら丁寧に読み、是非とも自己表現活動につなげていくことで忘れない記憶として心にとどめてもらいたい。

2) 味読(スローリーディング)による英語学習の楽しさ

斎藤兆史東京大学准教授は、英語学習の楽しさ、苦しさ、そしてそこにある矛盾を次のように述べている。「職業柄、様々な形で英語に接し、英語を使ってきた私の印象から言えば、日常的なことに関して英語で話ができるなどというのは、実はたいしたことではない。ある程度の英語力があれば、話などはなんとかかんとか通じるものである。話が通じた瞬間には大きな達成感を得ることができるが、その程度の達成感では、およそ英語学習の究極目標に据えるほどのものではない。むしろ私が深い喜びを感じたのは、英文学作品を読むことで英米、さらに英語圏の文化を理解することができたときであり、さらにその理解に基づいて自分たちの文化を考え直す機会を得た時である。最近では、英語の道具としての有効性ばかりが強調される傾向にあるが、本当の英語学習の楽しみとは、実用英会話よりもはるかに高いところにあるものだ」と。

知的レベルが高くなる高校生にとって、テキスト内容が日常会話レベルに留まり、コミュニケーション活動のためのものに過ぎないならば、物足りなくて飽きてしまう。内容が易しく読みやすいものであれば授業が楽しくなるというわけでもない。生徒の心に後々まで残るような内容であるならば、できる限り「分からないことは全くない」領域まで徹底的に読み、読解後は何に気づいて、何を感じ取ったのかを書き、それらを伝えるという自己表現活動を取り入れたい。英文をじっくり読むことで気づくセンスや受け取る感性を育てることができる。これが真の英語学習の楽しみであると思う。

普通に読むだけでは何も生徒の心に残らない。先生に対する親しみはあっても、授業そのものに対しての印象はゼロに近い。なんとかして生徒の心に後々まで残るように教えられるものはないのだろうか。子供たちのそれからの生活の糧になるようなテキストで授業がしたい(伊藤氏貴, 2010)。自分自身が高校生の時に英語の授業で何を読んだのか、ほ

んど何も記憶に残っていない。英語のコミュニケーション活動をして楽しいことであっても、その後の人生の糧となるものを得ることはできない。しかし、心に残る名作を読んで気づきや感性を引き出す授業であれば、たとえ記憶に残ることがないとしても、より崇高なリーディングの授業が実践できたと言えるだろう。教科書の内容如何によっては生徒を授業に引き込むことが可能であり、生徒にとっては決して易しい英文ではなくても、内容次第では授業についてきてくれる。教科書の内容を厳選し、シラバスを一部変更してでも、生徒の気づき、心の動きを大切にして感性を育てる授業を実践したい。

7. 読解力の育成

1) 素読

中学生の時に文法の型を覚え、厳しいトレーニングを行ってこなかった生徒にとっては、授業中の文法説明やその定着のためのドリルの時間が退屈なものになりがちである。そこで、読解力の手がかりとなる文法力をつけるためにも教科書を繰り返し音読させる必要がある。繰り返すうちに英語のリズムが体に入り込み、さらに暗唱させることで構文がしっかりと自分のものになっていく素読の学習法を是非取り入れることが重要だろう。しかし、何度も繰り返し読むからにはやはり名文が良い。そうなることややはり原文になるので、原文の一部だけでも授業に取り入れて音読させたいものだ。

語学学習では、名文を読むことが基本であるように、何かに熟達するにはやはり質の高いものに触れることが大切である(齋藤孝・斎藤兆史, 2004)。そして、本物=質の高いものを徹底的に吸収することがその後のすべての基礎をつくることになる(伊藤氏貴, 2010)。

2) 多読指導

英字新聞(*The Japan Times*, "Catch a Wave")を使った授業(北原延晃, 2010)について紹介する。

授業初めの約10分の速読教材として、新聞の記事を利用する。生徒が読んで楽しい、是非読んでみたいと思わせる素材を見つける。タスクを準備しないと読まない生徒がいるので、数問のQを用意し、黙読・Q&A・答え合わせを10分以内で行う。

記事の内容は up-to-date なもので、背景知識があるから読めるものを選び、知らない語があっても

読み進める態度を育成する。タスクは解答に下線を引いて番号をつけさせるだけにし、多少ずれても正解にする。短時間で終わり、skimming, scanningの練習にもなり、多少なりとも語彙を増やすことができる。学年が進むにつれてより難しい記事に挑戦させたり、重要語句に下線を引き、辞書で意味を調べさせたりするだけでも効果はあるように思う。

8. 音読を生かした単語小テスト

単純に、単語を英語から日本語に、または日本語から英語に訳させる単語テストはその場限りの暗記に終わってしまい、長期記憶にはならないだけでなく、単語の運用力にもつながらない。そこで、単語テストは教科書本文そのままを出題するようにし、授業中に音読をしっかりやっている生徒が得点できるようにする。また、予め出題する単語に下線を引いたプリントを配布し、どこをどんなふうに勉強したらいいかわからない生徒がテスト勉強をしやすくなるように工夫することが重要である。日頃実践している音読に意味があることを理解させ、また音読や筆写に効果があることを納得させるためにも、音読を生かした小テストを定期テストにも数多く出題したい。勤務校では、英語は勉強の仕方がわからないし、勉強してもあまり得点できないから定期テストの勉強もしないという生徒が少なくないのが現実である。

音読を生かした単語テストを定期テストの前に必ず行うようにし、定期テストにも同じ単語を出題し、生徒が努力したことが結果に繋がるテスト問題の作成に心がけていきたい。

9. おわりに

外国語習得の要でもある音声面を重視した英語教育に焦点を当て、音読の重要性に着目し、人間が言語を理解するプロセスを脳科学の分野から考察してみた。その結果、音読と筆写が記憶の効率化につながる事がわかり、また高速化することで、さらに脳が活性化されることが分かった。音読活動は言語習得に欠かせない活動であるばかりか、脳を育てる重要な活動であり、できる限り授業時間に組み込み、目的意識を持って音読指導に当たってきたい。

また、授業時間中の音読に時間をかけるために教科書の内容を厳選し、レッスンごとに軽重をつけなくてはならない。かなり高度な英文であっても生徒

は自分が興味を持つ分野についてのものは読もうとするものである。思春期の人格形成期にある生徒たちに一生忘れてはならない物の見方や感受性を伝えられる内容のレッスンは、「分からないところは全くない」レベルまでじっくりスローリーディング(味読)で読み、味読の教材を読んだ後は、是非とも自己表現活動を取り入れ、ペアやグループでシェアする機会を作ることが望ましい。

時間が許せばオリジナルの格調高い英文に触れ、本物の質の高さを味わい、名文を読むことにより、気づきや感性を引き出す授業を実践していきたいと考えている。

参考文献

- 伊藤氏貴 2010 『奇跡の教室 エチ先生と「銀の匙」の子どもたち』 小学館
- 大塚謙二 2011『教師力をアップする100の習慣』明治図書
- 金谷憲 2002『英語授業改善のための処方箋』大修館書店
- 金谷憲 2009『教科書だけで大学入試は突破できる』大修館書店
- 鹿野晴夫 2006『TOEIC テスト 900 点を突破する集中トレーニング』中経出版
- 川島隆太 2003 『脳を育て夢をかなえる』くもん出版
- 川島隆太・安達忠夫 2004 『脳と音読』講談社現代新書
- 北原延晃 2010『英語授業の「幹」をつくる本 下巻』ベネッセコーポレーション
- 國弘正雄・千田潤一 2001 『英会話・ぜったい音読 挑戦編』講談社
- 斎藤孝・斎藤兆史 2004 『日本語力と英語力』中央公論新社
- 斎藤兆史 2001『英語の味わい方』日本放送出版協会
- 斎藤兆史 2007 『これが正しい! 英語学習法』筑摩書房
- 那須正裕 2002 『やる気はどこから来るのか 意欲の心理学』北大路書房
- 本多敏幸 2011 『若手英語教師のためのよい授業をつくる30章』教育出版
- 茂木健一郎 2007 『脳を活かす勉強法』PHP 研究所
- 安木真一(近刊)『英語力がぐんぐん身につく! 驚異の音読指導法54』明治図書
- GTEC 通信 Vol.45 (2012/1/10)「生徒を伸ばす指導のヒント」http://gtec.for-students.jp/gtecmag/contents/vol45_1.htm

(本稿の実質的著者は金小路佳子教諭です)